

電脳千句第七 賦何水百韻

二〇一六年一〇月二四日から二〇一七年一月六日

於 さいばあすぺいす

一折表

秋風や雲うち払ひ山決る

樂歳

つるぎを照らす月はいざよひ

羽衣

文机にすすきひともと置かれるて

路花

近づく冬の足音をきく

夢様

ゆるらかに磯わたりゆく田鶴のこゑ

蘭舎

水棹のしづく散らす潮々

千草

つぶれ石並べて遊ぶ子らの居り

遊香

明けて涼しきるり色の空

梢風

大路ゆく綱代車の物見窓

朝姫

揺るるがままに夢のあとさき

如月

契りきや花の散り込む去年の里

衣

思ひ暮れば陽炎の燃ゆ

歳

やはらかな牧を駆けゆく春の駒

梯

萌黄匂の裾のゆらぎて

花

折節はこころなきみも目を細め

草

霧のしじまに盃を受く

舎

かたわれの月を迎ふる高館に

風

鳴くを忘れし虫のひと籠

香

尼削ぎのみ髪傾げてをさな顔

月

あな麗しき水茎のあと

姫

濃く薄く心のうちをうつしける

歳

つがはぬ鴛鴦をしのぶ独り寝

衣

二折表

憂きことの重なるあした霜白く

花

心づよきは老いの方人かたうど

梯

此の山を越えば信濃のつかまの湯

舎

み寺のいらか若葉がくれに

草

連れ立ちてつつましげなる蝸牛

香

たはむれせんと生れ出づる世

風

たらちねの母の刺し子の麻の葉も

姫

片時去らず想ふよすがに

月

鮎落ちて京みやこに近き皿の上

衣

訪ふ里の鶉鳴く宿

歳

琵琶の音に誘はれ仰ぐのちの月

梯

揺らす人なき柴の戸の揺れ

花

うつし世にかなはぬ恋と知りながら

草

なみだの川に架かる継ぎ橋

舎

二折裏

くたびれて寝ぬる合間を夕さりぬ

風

事あり顔を見るも見ざるも

香

まほらまの山辺のみち鐘かすみ

月

水温むころ旅立ちし人

姫

墨染めに花のひとひら舞ひおちて

歳

夢のまにまに蝶のたはぶれ

衣

髪さげし乙女子の声はんなりと

花

撫で育てしを奪ひゆくきみ

様

常夏にたゞ隔てじと慣へども

舎

あけやすき夜の月はいづちに

草

ひたひたと山の魑魅すだまの近づくや

香

いをなどを食ふ者のすさまじ

風

外つ國の銀しろがねの匙磨きつつ

姫

閑伽水汲める古渡りの椀まり

月

三折表

微かなるいくさの声は風に乗り

衣

ひとのこころのやみのふかさよ

歳

やがてみな西の涯へと往くものを

様

こゑも細りし冬の蚊なれば

花

黒髪の冷たく重く寝もやらで

草

ぬば玉の夜の衣返しつ

舎

うたてしと起きて来る子のしらみぐさ

風

秋のいで湯に流すしがらみ

香

産土神の千木に遊べる昼の月

月

かそけき音は光より生れあ

姫

歌よみのあづま下りのつらねうた

歳

僅か濁れるもてなしの酒

衣

厨には菜を切る音のよくひびき

花

手毬つく子のすがた優しく

様

遠山に東風のたよりのとどくらん

舎

おびただしくも青柳の糸

草

すいすいと飛べる燕のうらやまし

香

などて翁は籠を作るや

風

忘れ得ぬ薰り残りし玉手箱

姫

ほのと紅色てのひらの貝

月

しらじらと明くる月夜のかたみとは

衣

またの逢瀬を契る七夕

歳

ひとり居の宿に侘しき遠砧

梯

やすらふうちに時は過ぎ行き

歳

物語書きはじめむと紙と筆

草

あくがれあかす花のあだし野

舎

みやこより流行り始める春着あり

風

鄙の弥生に何ぞ求めむ

香

四折表

引鶴に絡繰り唐子遂立し

月

かいやぐら消え雲の棚引く

姫

この浦に今朝も小舟で漕ぎ出でて

歳

糸たぐり寄す罪ぞかなしき

衣

なにゆゑか雑魚の命もいとほしく

花

しはぶきひとつ冬空の下

梯

風の吹くもふかぬもうき名にて

舎

ただ身すがらに慕ひ来ぬれば

草

いくたびの園をくぐりて秋の月

歳

まつりごとには稲の穂をつみ

風

小牡鹿の声聞く里の直会に

姫

色なき風のわたる平城山

月

いにしへを知るは樟ばかりなり

衣

位捨つれば人も問ひ来ず

歳

四折裏

冠や袴要らぬ嬉しさよ

梯

さても今宵は筆こてなど聞きに

花

つつがなく帰りきませと門口に

草

なごりの雲の行くもすずしき

舎

傷く水に胸の透きゆく時を得て

風

かづらの橋を揺らす春風

香

咲き満つる神代の花のめでたさに

月

日のあたたかく鶯の声

姫